

「探り求める」

～神を探り、心を探る～

箴言 4 : 20 - 28

■ 心の内側に隠された鍵…

私達が心の内側を探り、自らを見極めていくと心の内側に隠されている幸せの扉を開くことのできる鍵を見つけることができます。イエス様はペテロにおっしゃいました。「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」ペテロはイエス様からこのように言われたのにこの後大失敗をします。三度もイエス様を否定して裏切ってしまいました。鶏が泣いた時、ペテロとイエス様の目が合います。そのイエス様の眼差しはペテロを責めるものではなく、どんなに優しいものだったことでしょう。ペテロはそのイエス様の眼差しを見て、外に走って行き、大声で泣きました。ペテロの人生はそこから180度本当に変えられました。それまでは誰が一番偉いか…という人生でした。けれど、自分を通して誰が幸せになれるかという人生に変えられていったのです。ペテロはこの失敗を通して自分の心を探ったのです。そして、探し尽くした結果、自らの内に隠された鍵を見つけ、幸せの扉を開き、その扉から多くの人が入ることができました。

■ 教会に来るのは自らを探るためです…

神様は創世の時代に私達を選び、目的を与え、価値を与え、喜んで輝いて生きるように創造されました。私達が喜ぶ姿を神様が喜ぶためです。ところが、人間は喜ぶ道から悲しむ道を選びました。アダムとエバが失敗した時に選んだのはごめんなさいの生き方ではなく責任転嫁でした。自らを見るのではなく相手を指さす生き方を選んだのです。私達が目線には自らを見る目と相手を見る目とどちらがついていますか？私達は自らの心の内側を見なければなりません。私達人間には当たり前にも歯が生え、おへそがついているように「良心」というものを神様は与えて下さっています。その良心の中心は「愛されている」ということにあるのです。自分を愛してくれている人が喜ぶか喜ばないかなのです。この良心を誰もが持っているのに感情に流されて本当はそうしたくないけど、そう言いたくないけどやってしまうのです。パウロは言いました。「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえってしたくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」これが私達の心の中にあるのです。だから、探らなければならぬのです。キリスト教が私達を罪人と呼ぶ本当の理由は自分の心を欺くからです。本当はこう生きたいのに様々な人の言葉や態度、環境…そういったものによって本当の願いを変えてしまうから罪人だと言っているのです。罪とは「的を外す」という意味なのです。

私達が何故この時代、この場所に置かれているのかを探らなければなりません。私達は何代も前からそれぞれの家に生まれることが決まっています。そして、その家を壊して来た様々な考え方や価値観を私達が決断して変えるために遣わされてきました。職場、地域 etc …関わる人々もそうです。探ることをせず、外れたままの生き方を生き、決断せずに感情的に振舞うのならそれらの人々は私達を通して傷つき、私達が願う姿とは違う道に進んでいきます。幸せの扉を開きたいと願うなら、もう一度、心を探り求める神様と一緒に、自分の心を素直に、客観的に見て下さい。自分のやっていることは本当に自分のしたいことなのかを見るのです。

■ 1 過去のマイナスをプラスに ～悔い改め～

過去のマイナスをプラスに変えるのは「後悔」ではありません。「悔い改め」です。後悔は失望・絶望・劣等感を与えるだけです。「ごめんなさい。」という気持ちは後悔とは違います。あの時こういう失敗をしたためにこういうことが起きたのでそ

の失敗を改めるだけなのです。それが悔い改めです。失敗は「失敗した人」が悪かったのではなく、「決断」が悪かったのです。ペテロも失敗があったからこそ自らの間違った生き方から180度変えることができたのです。自分を探る最大の方法は自分の失敗に目を向けてその失敗した時にどう決断したのかを考えることです。私達は自分が決断主であることをちゃんと感じなければなりません。

■ 2 目に入るものと正しく向き合う (箴言 4:20-22、イザヤ 55:10-11)

目に入って来る、特にマイナスな出来事とどう向き合っていますか？人のせいにして向き合ってしまったら終わりです。もうそこから得られるものは何もありません。その出来事が起こったのは「摂理」です。種を蒔けば刈り取ることになっているからです。目に入ってくるものは私達に訴えかけているのです。「…もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」と御言葉にもあります。神様は私達を愛しているから、直接言っても聞かないのだから気づいて欲しいと願っているのだから教会の家族がいるのです。真剣に向き合って一緒に戦ってくれているのだから指摘された時にはその家族を愛してください。逆に指摘する時も自分が嫌だったからとか自分を守る動機によって指摘するのは違います。大切な家族が本来の姿に戻るようにとの愛から語ってください。御言葉から語られた言葉、誰かから指摘された言葉、それは私達にとって宝でもあるし、私達を滅ぼす道具でもあります。どう受け取るかです。正しく受け取っていきましょう。

■ 3 全き模範と継承 ～私はいつも私の前に主を置いた～ (I 歴代誌 28:7-10)

ダビデも失敗をしました。自分に忠実だった僕ウリヤの妻バテ・シェバを寝取り、彼女が身ごもったことがわかったとそれを隠すためにウリヤを激戦地に送り殺してしまいました。ダビデはその罪を預言者から指摘された時、すぐに衣を引き裂き泣いて悔い改めました。やがてバテ・シェバから生まれた2番目の子どもがソロモンです。ソロモンは父ダビデの悔い改める姿を絶えず見て育っていきました。神様が神殿の建設をダビデではなくソロモンに託すように語られた時、ダビデは決して感情的に物事を行おうとはしませんでした。神殿を建てるための力も財産も材料もすべて持っていました。神様から語られた通りソロモンに託しました。ダビデも不完全でした。だからこそ、神様を見る生き方を選びました。そしてその神様を見る生き方を通してソロモンは正しく生きる人になったのです。

探りましょう…

イエス様は私達が正しく生きる模範となるために十字架にかかりました。イエス様がどのような道を歩まれたのかを探りましょう。鉛の鞭を受けた時も痛くて起きられないのにわざわざ立ち上がったのです。私達のために逃げなかったのです。だから、私達も自分の人生から逃げない道を選びましょう。目の前に問題があるなら、ちゃんとその問題と向き合い、その問題が起きた理由を探らなければなりません。後悔するためでも、人のせいにするためでもありません。自分の心の中に傷ついた心がないか、その心が何かをズラしてしまっているか、本当はこうあるべきだと思っているのにその傷ついた心が自分の中でプライドになって自分を守るためにそれを用いていないか…。探り、悔い改める時、私達は多くの実を結ぶようになります。私達が多くの実を結ぶことを喜ぶ姿を見るためにイエス様が十字架にかかられたことを覚えましょう。

(要約者: 全本 みどり)